

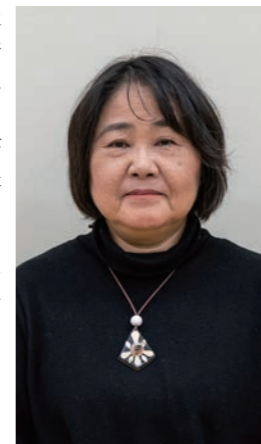
全国審査員からひとこと



表現はその子の“今”を大切に捉えることから

友達や保育者と様々に心動かしながら過ごす園生活の中で、その子らしい視点を安心して気持ちよく表現できたのだらうと思える作品にたくさん出会いました。

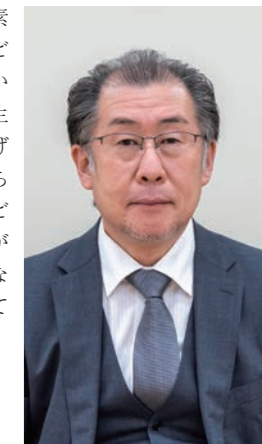
幼児期の描画は、客観的、論理的視点が確立されていない時期だからこそ、自己表現としての大きな意味を持つのだと思います。子どもが意図しない描き方や手法など、過度な指導で成長を先急ぐのではなく、その子の“今”を大切に捉えようとする保育の場が確実に増えているよい兆しを感じました。



伊藤 裕子（学校法人裕学園 谷戸幼稚園 園長）

創意工夫を楽しむ子ども

子どもたちが、生活の中で見つけた素敵なもの。友達、乗り物、景色、夢などの大切にしているもの、大切に思っていること。それらが、友達との対話や先生方の指導等により自身の内面で練り上げられ、画面に思いが込められた作品たちでした。これからも、全国各地で、子どもたちが創意工夫を楽しむ豊かな活動が展開され、このような自分らしく素敵な作品たちが生まれ続けることを期待しています。



宇賀神 俊彦（栃木県宇都宮市立城山中央小学校 校長）



動機付け

年中・年長から中学校までのそれぞれの段階で絵を描く動機付けは異なるものです。感覚的、体験的な段階から対象を観察し理解しようとする段階、様々な周辺環境や自分自身の存在、社会への視点が芽生える段階、画材などの技術的な経験をもとに表現を積み上げていく段階、これらは成長に対応しつつも複雑に絡み合いながら多面的にそれぞれの段階の表現に反映されます。

多数の子供たちの個性を尊重し、その表現の独自性を伸ばすための動機付けにも多面性を求められるのは言うまでもありません。



玉川 信一（全国教育美術展担当理事、筑波大学 名誉教授）

人が絵を描くことの再評価

膨大な知識を詰め込んだAIの答えが、人の思考を上まわるとさえ言われるとき、子どもたちが体全体を通して描こうとする活動に新たな光が当たろうとしています。自然の空気のおいや肌触り、動物たちの生命の気配や心に響く音など、データとして処理できない膨大な感覚を、子どもたちは絵の具の手触りと共に形と色に置き換えていきます。AIを活用することが当たり前の世界を生きていく子どもたちだからこそ、描くことを大切にしたいと思います。



大坪 圭輔（武蔵野美術大学 名誉教授）

対象なるモノを描きながらも、伝えたいコトを描く指導を

花を描くことを例にあげると、指導者がよく観察することを優先的に促すと児童たちは丁寧でそっくりに描く作業に方向付けられますが、対象を見て感じたことを描くように促すと、必ず枯れる対象物を前にして、生命観をどのように表現しようかと個人ごとのテーマが生まれます。同一の対象物をそっくりに描く前者は、それぞれの完成作品も当然似たものとなりますが、後者は様々なテーマ設定、画面構成、色彩選択を可能にします。伝えたいことも個人ごとに明確なので、タイトルに対象物の名称、行事名、観光施設名だけがそのままつけられることもないでしょう。



加藤 修（千葉大学 名誉教授）

素材は創造性のタネ 情報は想像力のネタ

絵を描くことは、自分に向き合い、美を求めることであると思います。自分で素材の変化をうみだし、あみだし、色と形をつくり出す「美の発見」です。

自分の原理原則で図式を構成し、自分の術や身体を創意工夫することで、表現が結晶します。描画発達が9歳までの子どもは、知覚的な写真で自分のリアリティーな世界を表現します。動植物、昆虫、乗り物などに生命力を感じ想像力を働かせて、ファンタジーやメルヘンを創出します。擬人化やレントゲン描写、展開図法、カタログ状に並べ構成する、絶妙な空間のバランスや感覚の鋭敏さに感動する大切な思考の時間でした。



石丸 良成（東京造形大学 非常勤講師）

表現の原点、描く喜び

特別支援学校から送られてきた作品を見てみると、際立って何かを訴えている表現に出会うことがあります。それは、コロコロアートのような技法で生まれた没個性的とも思われる作品の中にあっても、光って私の心に訴えてきます。偶然か意図的にか、紙面に生み出された色彩や描線が生き生きと踊り、表現の喜びが波動のように伝わってくるのです。たぶん、この作品を送って来られた先生もその喜びを感じて送ってくださったのかと思うとうれしくなります。



金子 光史（アート工房「フェース of ワンダー」代表）

子どもにとって幸せな時間

一つ一つの作品からは、子どもが自分の感情や感覚に素直になって、丁寧に画面に関わっている姿が想像できました。自分のイメージや思いに導かれて、絵の具を混ぜたり線の動きを操作したりして、自分なりの意味を見つけ、「いい感じ」（納得する状態）にしていく過程は、自分と向き合う時間であり自己実現の喜びを感じる時です。おそらく自分の絵が完成した時には「見て、見て！（これが私の感じる世界だよ）」と周囲の人に見てもらうことにも喜びを覚えたのではないのでしょうか。子どもにとって幸せな時間をこれからも確保していきたいですね。



栗山 誠（関西学院大学 教授）

自己を超えていく表現の強さ

美術科の授業では、お手本的な答えを出すのではなく、自分を超えていく体験をしてほしいと、子どもたちに伝えています。美術は想定外の自己発見があるからこそ面白い。それが、この教科の特徴的な学びの要素だと考えています。審査会では、表現の過程に新しい自己を見出した時のハッとするようなエネルギーの強さを観点に、作品を見させていただきました。全国の教室で生まれた力強いすてきな作品との一期一会に感謝します。



小浜 かわり (徳島県阿南市立阿南中学校 指導教諭)

今の時代だからこそ大切となる資質・能力

今回の審査で、子供のつぶやきが聞こえるような作品、自分との関わりが感じられる作品、表現することを楽しんでいる作品などに会いました。自分にとって新しいことやものをつくりだすように発想や構想をすることや、自らもっている技能を発揮し、新しい方法をつくりだしていくことは、子供がよりよい未来を目指して豊かな生活を創造していく上でも重要であると思います。予測困難な今の時代だからこそ、資質・能力の育成を目指し、創意工夫された授業から生まれる作品が一層増えていくことを願っております。



小林 恭代 (国立教育政策研究所 教育課程調査官)

想像力と創造力を育み生きる力を

みずみずしい感性で描かれた、生命力にあふれた作品の数々、審査の場を通して楽しく見させていただきました。日々の体験の中で感じたこと、思いめぐらせていることなどを、固定概念にとらわれない、子どもならではの視点や解釈で表現されている作品が印象的でした。「想像力」と「創造力」を育むことで、社会で活躍する力が養われます。これからのびのびと描画を楽しんでください。



中村 裕子 (NHK コンテンツ制作局第1制作センター (教育・次世代) チーフ・プロデューサー)

「表したいこと」を見付ける

「私はこんなことを表したかったんだよ」という言葉が伝わってくるような素敵な作品に出会うことができました。それぞれの作品から、様々な体験、夢や想像の世界、感じ取ったことや考えたことなどを基に発想や構想をして、形や色彩の特徴や美しさなどを大切にしながら、何度も考え直し工夫して描いた子供たちの姿を想像することができました。今後も子供たちが表したいことを見付け、様々な工夫ができるような授業実践が進んでほしいと思います。



平田 朝一 (国立教育政策研究所 教育課程調査官)

作品=C(形+色) 教育=T(教+育)

C=子ども、T=先生です。この式は私が審査で大切にしました。作品にはTはいません。でも、今回は全国教育美術展、Tの関わりは重要です。教>育ではなく、教<育が本来です。育による作品には、自身の成長を喜ぶCの笑顔+「こう育ってほしい」というTの愛情が踊っていました。私は今、再任用で美術の授業を持っています。Tの奮闘に共感します。夢は教えられません。育がCの夢を育みます。私も、育の審査ができたかな。



鷹野 晃 (山梨県北杜市立明野中学校 元校長)

心に思い描き、描く喜び

描くことは、心の中ではじまっています。それぞれの豊かな心の感覚を、心の外に表す表現が、紙に描く表現です。描くことで目の前に広がる自分の描画から、さらに想像し気づきが生れます。自分と描画との応答的な対話がはじまり、表現の軌跡が目前に広がっていきます。こどもが描く表現から、そこに描いた表現を、絵の具やクレヨンの筆跡を、心の対話として受けとめ、丁寧に鑑賞し読み取っていくことが大切です。



照沼 晃子 (関東学院大学 教授)

導かれて「成る」

画材や支持体(画用紙等)に導かれ、描き手の意欲と手探りの努力や工夫によって作品が「成る」ことを思いました。また、そのことをよく知っている指導者のもとでは、個の力を超えて作品が「成る」ことを感じました。解き放たれた描き手のまなざしと鼓動を作品に感じるとき、とても幸せな気分になります。



仏山 輝美 (筑波大学 芸術系教授)

「絵に表す」学習のこれまでとこれから

従来の題材や主題を探索しようとする傾向と同じ題材でも新たな主題や表現様式を模索しようとする傾向との分化が垣間見られた小学生の作品群。従来からの写実的表現の探究に、より拍車がかかり、生徒の内面性が一層リアルに表出されている中学生の作品群。双方から、多様性という概念だけでは括りきれない時代の潮流を予感しました。そして、義務教育における必修学習としての「絵に表す」活動のこれからの思いを馳せる審査会となりました。



堀井 武彦 (お茶の水女子大学附属小学校 教諭)

自分に向き合い表現する子供たち

この子は、どんなことを感じたり思ったりして表したのかなと私なりに想像力を働かせ、その子の思いを辿るような気持ちで一枚一枚の絵を見ました。描いた線や選んだ色、捉えた形などその子なりの発想や表し方に思わず引き込まれました。子供が自分に向き合い、満足のいく表現をしているからこそ見る人に感動を与えるのだと思います。私は、この審査会を通して全国の子供たちの創造性豊かな作品に出会えたことをとてもうれしく思います。



中下 美華 (京都府京都市立西京極西小学校 校長)

子どもの「描きたい」を大切に

子どもたちの作品に触れる審査会は、まるで子どもの絵の美術館にいるような幸せなひとときでした。たくさんの作品の中で、子どもたちの「自分はこれを表現したい」「自分はこんな形で、こんな色で表したい」などという思いが伝わってくる作品は自然に目に飛び込んできます。子どもの「描きたい」という熱い気持ちを感じました。そんな一人一人がもっている感性や創造する力がますます高まっていくことを期待しています。



中島 尚子 (熊本県熊本市立長嶺小学校 校長)

日常生活の中の美を発見する

今年もたくさんの表現力の優れた作品に出会うことができました。いつも思うことですが、中学校1年生から2年生になると一段と表現力が向上してくるようです。日頃からしっかりと物を観察して美しさを見つめること、自分なりの表し方描き方を見つけることが大切です。やはり日常生活の中で、ふと美に気づいた時に描くこと、美しさを文字で書き留めることもよいかもしれません。感受性を研ぎ澄ませて日常生活の中の美の発見に努めましょう。



松山 明 (大阪芸術大学 特任教授)

子どもと教師で生み出す絵

多くの作品が並ぶ中に、思わず足を止めて見入ってしまう絵がありました。第一印象で魅力を感じ、惹き付けられたためです。そうした絵には子どもの創造性が十分に表れていますが、傍らにいる教師の存在あってこそそのものだと思います。子どもが表したいことを強くもち、絶えず造形的な工夫を続けていけるように、教師はどのように関わったらよいか。子どもと共によい絵を生み出そうとする気持ちを大切に、考えていきたいと思えます。



三浦 茉莉子 (秋田大学教育文化学部附属小学校 教諭)